第一部　（手記・空襲）

東京大空襲

矢沢　咲子

忘れることができない、昭和二十年三月九日、夜の大空襲～あれから六十年余の月日が経ちました。

あの夜、いつもの様に家族揃って食卓を囲み、ささやかな夕食を、済ませた直後のことでした。警戒警報を知らせる不気味なサイレンの音が鳴り響きました。その音と同時に、「ゴー」と言う風を切るような音、空を見上げるとB29爆撃機が何機も近づいてきて、低空飛行で爆弾を雨が降るようにバンバン投下してきました。その度に、あちこちから火柱が上がり、すごい地響きと爆音が、聞こえてきました。人々は、激流の様に流れる炎と、熱風を避けるのに必死で逃げまわりましたが、炎は容赦なく逃げ回る人々を追いかけ、着ている衣服、持ち物に燃え移りました。

火だるまになった子供を抱きかかえ、半狂乱になってしまった母親の姿、我が子の名前を呼び続けて泣き叫んでいる人、やけどで皮膚がただれてしまった人、頭から血を流して、助けを求めている人……生き地獄としか言えません。この時の恐怖とショックは、今でも忘れられません。あの日の夜は、一夜で十万人もの尊い命が奪われ、三百万人の人々が罹災したとか……。

我が家の八人家族は九死に一生をえて、三月十日の朝を迎えることができました。運がよかったのか、神に守られていたのか……いいえ、母の愛が私達家族の命を救ってくれたのです。

その夜、父はサイレンの響きと共に、妻と子供達を残して職場に飛んでいきました。どんなに後ろ髪を引かれる思いだったでしょう。そんな母には、六人の子供達を守らなければいけないと思う使命感があったのだと思います。家の前にあった防火用水からバケツで水をくみ出しては、子供達の頭（防火頭巾）に水を何回も掛けてくれました。飛び散っている火の粉だけは、なんとか避けられました。

近所の人達は早々と逃げてしまいましたが、母は家の前から、逃げようとしませんでした。取り残されたのは、私の家の家族だけでした。母は「この場所で、みんな一緒に」と、死を覚悟していたのだと思います。父が探しに来た時に、すぐ判る様にと、父への思いやりだったのかも、知れません。

とうとう我が家にも火が燃え移り、家が崩れだしました。その時、身の危険を感じた母は、腰に結んでいた一本の紐を目の前に出し、

「みんなこの紐に掴まって！　離してはだめだよ」と叫び、母を先頭に紐を強く握りしめ、隅田川の近くまで逃げました。風と、煙と、熱風で、眼を開けていることも困難でした。喉も熱気でひりひりと痛く声も出ません。でも、そんな中、母は命懸けで子供達の名を呼び続け、励ましてくれました。一本の紐が、家族を結ぶ命綱でした。川まで、わずか一キロ程の距離でしたが、突風二十五・七メートル（当時の記録）にあおられ、一歩前進、三歩後退で目的地にたどり着くまでは大変な苦労でした。ところが、やっとの思いでたどり着いた隅田川は、火の海で、川に一緒に飛び込むつもりだった母は、そこで思い留まったそうです。ここでも母の決断が、一命をとりとめたのです。コンクリートのわずかな壁の隙間に、家族が身を寄せ恐怖に震えている時に、隣に並んでいた倉庫のドアの開く音が聞こえ、私達は助けを求め中に入れてもらいました。倉庫の中には、五～六家族がいたでしょうか、父のいない不安から少しほっとしたことを、覚えています。ところが、倉庫の中でも、あちこちから炎が上がり、その度にみんなでバケツリレーをして火をくい止めました。

そして悪夢の一夜が明けてみると、見渡す限りの焼け野原、あちこちでまだ燻（くすぶ）っていたり、水が吹き出ていたり、すっかり光景が変わってしまいました。私達の顔も煤（すす）で真っ黒、眼は真っ赤、お互い生きていられたのが不思議で、助かった人々と、抱き合って泣きました。真っ黒になって、転がっている死んだ人達の山、まるで、マネキン人形の様でした。もちろん、男女の区別などつきません。翌朝、こんなひどい光景を見ながら、家族の安否を確かめに帰って来た父は、一家全滅を覚悟したそうです。全てを失ってしまった悲しみに、父は焼けた家の前で呆然と立っている所を、母が発見しました。父への思いが、通じたのでしょう。父の姿を見て、私達も父の懐に一目散に飛んで行きました。父は、「生きていてくれたのか、ありがとう。ありがとう。」と一人一人を抱きしめてくれました。母には感謝の言葉も出ず、ただ手を握り合ったまま涙、涙で声になりませんでした。あの時の『父の温もり』は、私の体の中に一生残っている大切な宝物です。母の判断力と決断力が、家族の命を救いました。『母の愛は深く、母は強し』です。あらゆる苦難を乗り越え、六人の子供達を育ててくれた母も、老後は子供や孫に囲まれ、穏やかな日々をおくり、八十八才の天寿を全うし、父の眠れる地に安らかに旅立っていきました。

戦争は、人を傷つけ悲しませ、なんて悲惨なものでしょう。一瞬にして命も物も奪ってしまう戦争は、決して起こしていけません。人類のためにも、この地球上に戦争のない平和な日々が訪れることを願ってやみません。

空襲の体験

横尾　敦夫

私は生れたときから現在の高輪の地にずっと住みつづけ、同じ場所から戦前、戦中、戦後の移り変わりを見てきました。戦争のときもここで空襲を体験しました。

東京が最初に空襲されたのは、昭和十六年十二月の真珠湾攻撃からわずか四ヶ月後の昭和十七年四月でした。アメリカの空母から発進した艦載機によるものでしたが、この頃は国民が勝利に酔いしれているときでしたから驚きました。しかしこのときは実際にアメリカの飛行機を見ることは出来ませんでした。

このあと六月にはミッドウェーで日本艦隊、空母が大打撃を受けていましたから、開戦から半年後にはもう敗戦への道をたどり始めていたと思います。

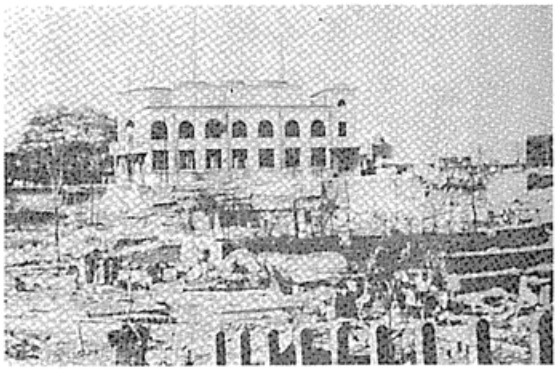
昭和十九年の春に中学に入りましたが、その年の末にはアメリカのB29爆撃機を東京の空でも見るようになりました。一万メートル以上の高空を飛ぶ飛行機に高射砲は届かず、迎え撃つ日本の戦闘機も殆どありませんでした。

終戦の年、昭和二十年に入ると、弟や妹は学校から集団疎開しましたが、私は両親と東京に残っていました。三月十日の大空襲のときは、寝てまもなくけたたましい高射砲の音で目がさめました。二階に上がって見ると、隅田川の方角に、あちこち火の手が上がり、たちまち融合して一つになりました。そのあと風下のこちらにも火の粉が飛んできて、消して回ったことを覚えています。いつもと違って低空で飛ぶB29のジュラルミンの機体に、燃える炎が反射して真っ赤に見えたのが印象的でした。

山の手が本格的に焼けたのは五月の空襲でした。当時、中学生には軍事教練が課せられ、五月の下旬には我々は富士の裾野におりました。空襲の夜、誰かの叫ぶ声に外に出たら、東京の方の空が赤々と染まっていました。それをみんなただ呆然と見ていました。

そのあと、何とか汽車に乗って帰京しましたが、品川に近づくにつれ、周囲にはまだ燃えつづけて煙の出ているところがありました。品川からの山手線はまだ恵比寿までしか開通していませんでした。高架の五反田駅から見ると、我が家の方向は坂の上まで焼け野原で何も残っていませんでした。このときはもう家は焼けてしまったと覚悟しました。そしてやっとたどり着いた青山の学校も完全に焼け落ちていました。我が家の焼け跡には誰かいるだろうと、青山から高輪まで

歩いて帰りましたが、奇跡的にその一角だけは焼け残っていました。同級生の中には留守中に一家が全滅して一人だけ残された人もいました。青山通りのアスファルトには黒く焼けこげた人の形が残り、道端には黒焦げの遺体が何日も放置されていました。赤ちゃんを背負ったまま焼け死んでいたお母さんの姿が未だに目に焼きついています。悲惨な戦争が終わって、もう六十年以上がすぎてしまいました。戦争を知っている世代もかなり減りました。この先も日本に平和がずっと続くように願っています。



港区史

第一部　（手記・空襲）

空襲　増上寺と門前

米山　昭二

今年も本所の東京都慰霊堂を参詣しました。空襲で死んだ友人が三月になると夢に出るのですよ。良い奴でね、運動神経の鈍い私を引っ張ってくれましてね。まさか彼が三月十日の空襲で死んでしまうなんて思いませんでしたよ。（私、小學校は桜川、その後の五年間は本所の安田商業に通学しました）

東京に初めて空襲警報のサイレンが鳴ったのは、昭和十七年四月の土曜日です。米軍機が荒川方面に爆弾を落とすのを、両国駅のホームで彼と見て居ました。赫々（かくかく）たる戦果を挙げている筈の日本が何故あの飛行機を撃墜できないの？」と二人で顔を見合わせましたよ。米国とその同盟国が飛行基地を整備すると、本格的な東京爆撃が始まったわけです。終戦まで米軍機襲来は百十二日・十一万五千人の都民が犠牲になったそうです。

親友は三月十日の夜半、悲運な死に方をしました。戦災関係展示室の焼け爛れたローライコード、あれは彼が愛用したカメラだと思います。

三月十日は陸軍記念日で、その夜たっぷり川向こうを焼き払った米軍機が、余った焼夷弾を、増上寺境内の徳川家北の霊廟と栄町周辺に投下していきました。五月二十五日の海軍記念日に襲来した爆撃機は、増上寺本堂と徳川家南の霊廟・そして門前の町々を火の海にしました。不覚にもその夜、私は松戸に疎開した伯父の誘いで、栄養補給の一泊をしていました。翌日早朝「我が町は焼けない」を信じつつ、常磐線の鉄橋を怖々渡り、山手線の枕木を頼りの、長い列に加わりました。東京駅には焼夷弾の殻が散乱していました。新橋駅ホームに辿りつき、南西の方角に目を凝らしました。お山の三門は焼け残っていました。でも御本堂が見えません。コンクリート造りの大門と不動銀行と尾上菊五郎邸の土蔵だけは確認できましたが、その間に見える筈の木造二階建ての我が家はありませんでした。霧雨が焼跡を濡らしていました。焼野原の東京は暑いです。バラックの我が家には居られないので、芝公園の木陰で半日を過ごしました。増上寺境内の礎石・敷石・相当数の石灯籠が往時を偲ばせ、失った文化財の痛みを感じさせていました。救いだったのは十基の古墳の起伏はそのままで、周囲に枝を広げ若葉を茂らせる巨木たちが、私に頑張る力を与えてくれました。

私は今、三田の都営住宅に住んでいます。東京駅南口行きのバスに乗り、赤羽橋を渡ると芝公園の森に入ります。右は東京タワー、左に高層ホテル。「僕たちの小学生時代は紅葉谷の崖を利用した滝の音が聞こえた。左の弁天池の蓮のむせ返る匂い、丸山古墳の五重塔を描きさえすれば夏休みの宿題は二重丸はバッチリ……」あのバスに揺られている数分間は、幼かった日々、共に遊んだ友人たち、そして平和の日本も知らず焔の中に消えた安田の仲間たちを思い出します。

港区史

私の疎開記録

井上　繁

私の疎開先は埼玉県北のある町です。ある商家の裏庭にあった離れを借りることができ、昭和十九年四月の新学期に合わせて疎開しました。その年の夏に母が妹二人を連れて合流するまでのほぼ四ヶ月の間は、十五才の姉と六年生の私それに三年生の弟と三人だけで暮らしていました。

転入学の手続きに疎開先の国民学校に母に連れられて行ったとき、先ず驚いたのが校庭の広かったこと。東京に居たとき在学していた学校の校庭は特に狭かったので広さの違いがとくに目立ったのです。そして、学校が始まって最初の驚きは朝礼の際の行事のすべてが六年生が吹くラッパの音で進行したことでした。そしてもっとも驚いたのが学校の便所のし尿の始末で、大抵は付設の高等科の生徒の役目でしたが時々六年生に回ってきたことです。肥え桶に汲み取りそれをリヤカーに積んで、一キロほど離れたところにある学校農園まで運ぶのです。東京からの疎開者だからと外してくれる筈もなく汲み取りから運搬まで土地の子と全く同じにやらされました。学校農園は利根川の土手に一度上がらなくては行かれません。その登りの道でリヤカーを引く当番に当たったこともありました。

当時、働き手を兵隊にとられ手不足で困っている農家が多くありました。そのような家には学校からまとまって勤労奉仕に行きました。田植え、夏の田の草取り、稲刈り、麦踏み、蚕が食べる桑の葉摘みなど、いろいろな農作業を手伝いました。幼いうえに都会育ちその上栄養不良とあってはたいしたことはできなかったとは思いますが、自分なりにどの仕事も一生懸命にしたのは確かです。どんなときにも戦場で戦っている兵隊さんの苦労を思えば何のこれしきという思いがありましたから。田んぼでの作業では蛭に何箇所も吸い付かれて脛が血だらけという経験もしました。この農家の手伝いでは一生忘れられないことがあります。それはある家の田植えを手伝ったとき、昼食時に田んぼからその家に戻ると、その家の縁先に白米の大きな「おむすび」が、どっさり置かれていました。私たちの昼食用に用意されていたのです。この「おむすび」のおいしかったこと。その後今に至るまで、おいしさの点でこれに勝る食べ物に出会ったことはありません。

学校農園は土手沿いの台地でしたから畑で、それとは別に田んぼがありました。田んぼは火葬場に接していました。当然のことながら、田植え、草取り、稲刈りと、ひと通りの作

業がありました。「いし（土地の言葉でお前の意）はそっちをやれ」と、火葬場に一番近いところに振り向けられることもありましたが、これは誰もがお互いにからかい半分にやっていたことで、特に私へのいじめだったわけではありません。学校の作業には妙なものもありました。桑の枝の皮むきもその一つです。蚕に葉を与えて用済みとなった枝を折って、学校へと運び込み校庭で皮をむき天日に干しました。兵隊さんの服の原料になるという話を耳にしましたが真偽の程は判りません。何に使ったのでしょう。

毎月一日、朝早く氏神様の境内を清掃するのも近くに住む四年生から六年生までの役目でした。戦争に勝つことをただ祈願するだけではなく、神様へのご奉仕の作業が神様の御心に通じ、戦争に勝たせて貰えるものと思っておりました。

第一部　（手記・疎開）

「平和への願いを込めて」

紺野　タメ子

昭和十九年四月私は胸ふくらませて教師として初めての職場芝区神応国民学校（現在の港区立神応小学校）の門をくぐった。その時四年生以上は栃木県川治に学童疎開が始まっており、私は三年生の担任となりました。

さて、私は八十年位の今までの間に恐ろしい、嫌な思いをした時が二回有ります。一回目は私が小学校高学年の時に起こった二・二六事件です。二回目はアメリカをはじめ、世界の大きな国々と日本が戦争をした事。その戦争で神応小は焼夷弾を落とされ全焼してしまったのです。その時の様子を私はこの目ではっきり見ており、今も他の事は忘れてもこの事だけは頭から離れません。私は、この東京が、いいえ日本の国に敵が攻めて来るなどとは思っても見ませんでした。この戦争の始まる前から中国と戦っていて、昭和十六年十二月八日からアメリカとの戦いを始めたのです。初めは海の向こうで戦っていていつも勝った、勝ったと放送され、そのたびに提灯行列などしてバンザイ、バンザイをしておりました。そ

の頃はテレビは無く、ラジオだけでした。ところがそのうちに一般の家の窓の手すりの鉄など、金属、宝石類を供出するように言われ、皆お国の為に無料で差し出しました。

昭和十九年四月頃都会は危ないという事で小学四年生以上は、山奥に疎開ということになり、始めは希望者だけでした。神応小は栃木県の川治温泉の一柳閣という旅館が疎開先でした。今は大変簡単に行けますが、その頃は浅草から東武電車に乗って各駅停車で今市の駅で乗り換え、藤原駅で降り、それから山道をかなり歩いて行くのです。朝早くから一日がかりでした。本当に山奥でした。私はその時残留組といって東京に残っている組でした。午前中授業をして、午後からは高等小学校（高等小学校というのは今の公立中学校のようなもので二年で卒業です。神応小には女子だけの生徒が勉強しておりました）の生徒を引率して、今の東大医科学研究所（その頃は伝染病研究所、普通には伝研といっていました）へ勤労奉仕に行っていました。勤労奉仕とはお金など貰わずに働く事です。仕事は馬の血清で作った薬が小さなビンに入っていて、そのビンに蓋をする作業でした。生徒は皆二時間くらい立ちっぱなしで、おしゃべり一つせずに一生懸命手伝いました。

そんなある日学校の二階におりますと、突然もの凄いキンキンとした音がしたと思ったら雷の落ちた様なもの凄い音が校庭の方でして、窓から見ると校庭の真ん中に何か突き刺さっておりました。後でわかったのですが、空中戦をした飛行機が空中分解して、そのプロペラの破片だったのです。この頃は敵の飛行機が日本のどこかに近づいたら警戒警報のサイレンがウーーと鳴り、直ぐ近くにきた時は空襲警報のサイレンがウーウーウーウーと鳴る事になっているのに、この時は何の知らせもなかったのです。校舎でなくて良かったと思いました。こういう事は前にも一度昭和十七年の四月まだ私が学生だった時、小石川の学校でありました。その日はとても良い天気でしたので友人達と屋上で足を投げ出してお弁当を食べていた時、晴天の空にぽっかり一つ浮かんでいる白い雲の中からいきなり大きな飛行機が通り過ぎ「なに、あれ」と言っている内に早稲田大学の方でもの凄い音がしました。驚いていると学校のスピーカーがなり「皆早く家に帰りなさい」と言われ、急いで家に帰りました。夜のラジオのニュースで判ったのですが、その時の飛行機はアメリカので、早稲田大学に行き、低空して機関銃で男子学生が三人くらい殺されたとの事でした。

さて話は元に戻りますが、その頃神応小の校庭には二箇所に防空壕が作ってあり（防空壕は地面に細長い穴を掘り、木の柱で中が崩れない様にして、人が入ったら蓋をする様にしてあった）、プールにはいつも水を張って、側にバケツを置き

火事に備えていました。又、銀座通りとか新宿通とか広い通りで広い歩道のある所には、所々の歩道に防空壕が作ってあり、警戒警報が鳴ったら、歩いている人はもちろん電車に乗っていた人も、電車は止まり、皆近くの防空壕に入るように言われておりました。その頃の人々の服装は、長ズボン（モンペと言っていた）長袖防空ずきんを被り、薬や包帯の入った救急袋を下げ、上着の胸には大人も子どもも白い布に住所と名前と血液型を書いて縫いつけていました。爆風にやられるので夏でもなるべく皮膚が出ない様にしていたのです。私は子どもの頃から今の中央区京橋に住んでおりましたが、まだ日本が勝っていた頃に東京港（その頃は京橋区越前堀にあった）から東京駅まで凱旋通路を作るとかの話があり、長年住んでいた京橋から新宿区の柏木に移りました（その後凱旋通路どころではなくなりました）。

昭和二十年三月十日の朝、電車が動かず新宿から歩いて神応小に来てみますと、学校は全焼し、煙がくすぶっていて、学校には他の先生は二、三人しか見えず生徒も来ておりません。どうする事も出来ず消防団の方にお願いして家に帰る事にしました。学校の近所の方々は皆煤けて、どす黒い顔をして呆然としており、煙にやられたのでしょう。三月九日の夜から十日の朝にかけて今の江東区等、主に下町が大空襲にあったのです。神応小も同じ日に無くなってしまいました。現在の神応小は四階建てのコンクリート造りですが、昔の神応小は木造二階建てでとてもモダンな作りで、正門は現在の場所で校庭の東南に畳敷きの武道館がありました。玄関の上には三角屋根があって窓は上下に上げ下げするものでした。学校の焼け跡に大きな金庫だけが煤けてデンと座っておりました。この金庫は大きな物で今の大型冷蔵庫を二つ並べたような大きさで、中には学校の大事な物がたくさん入っていました。お金も入っていて、一週間位して熱が冷めてから中を開けると、中の物、特に紙類は触るとミリミリと粉になってしまうのです。煤けたお札をお盆に載せてそーっと男の先生と二人で日本橋の日本銀行本店で、きれいなお札と取り替えてもらいに行きました。その時の銀行の中は、まるで冷蔵庫の中のように寒かったのが忘れられません。（その頃は百円札が一番で、千円、万円のお札はなかった。）

話を十日の日に戻しますが、その日はどうする事も出来ず又新宿の家まで歩いて帰りました。その頃は地下鉄は渋谷駅から浅草駅までの銀座線だけしかなく、他は全部路面電車でした。電線がメチャメチャにやられていますから、電車は動きません。神応小から、天現寺、広尾を通り、青山一丁目、信濃町と歩いて帰る途中、四谷三丁目を新宿通りに出て左に曲がって少し新宿の方へ歩くと、右側に四谷第四小かと思いますが、鉄筋の校舎だけがニューッと見えました。普通は他

の家で通りから見えませんでしたが、周りが焼けてそこだけ良く見えるようになっていました。そしてその屋上の金網の手摺には仰向けに飛行服を着た大男がぶら下がっているのが見えました。アメリカ兵でした。空中戦でやられたのでしょう、胸がドキドキしました。

その後有楽町駅のそばにある泰明小学校も爆弾にやられたとの事を聞き、私には友人の先生が居たので歩いて行ってみました。鉄筋の校舎は崩れて無惨でした。近所の人の話では、怪我をした先生方は築地の海軍病院（今の癌研）に運ばれたとの事でした。又歩いて病院にお見舞いに行きました。なんと病院の玄関からと各部屋いっぱいに包帯だらけで目と口だけ出している人がずっと並べて寝かされていました。誰が誰だかわかりません。私はそれを見て貧血を起こし、薬を頂いた事を覚えています。本当に「地獄」とはこういう事かと思いました。友人も命だけは助かったのは、白い手袋をしていたからだそうです。暗いところで白い物が動いているので助け出されたそうです。友人はその後学校へ戻っても、顔が「火傷」で怖いので生徒が恐がるとかで、教職を辞めたと聞きました。

毎日毎日夜、敵機がやって来て照明弾、焼夷弾、爆弾を落として行くのです。昼間はあまり来ないで、夜来て寝かさないのです。照明弾というのは、花火の火の粉が散らばって、空いっぱいにゆっくり落ちて来て、地上が昼間のように明るくなるのです。

あまり東京がひどくなって学校も焼けてしまったので、残留組も一年生から全員川治に行く事になりました。田舎のある人はそちらに行きました。これを縁故疎開と言います。浅草から東武電車に乗る時、階段に腰掛けておにぎりを食べようとすると、後ろから真っ黒い小さな手が出て、持っていかれてしまった事もありました。その頃、家も親も無くし、ひとりぼっちになった子供たちが上野の駅辺りにたくさんいて、夜は上野の山の下のトンネルで寝起きしていたようです。子どものホームレスが沢山出来たわけです。本当に恐ろしい光景です。

疎開地では、盛り切りご飯、貧しいおかず、おやつはほとんど無く旅館の廊下には寂しそうにしている子どもの顔。でも泣く子はいませんでした。温泉地ですから毎日温泉に入っているのに、何故か子供たちにはシラミが頭にも体にもたかりました。寮母さん（母親がわりとなってお世話する人）がバリカンで頭の毛を刈ると、頭の毛穴に半分にちぎれたシラミが刺さっているのです。男の先生が、白い粉（ＤＤＴ）の薬を頭の上からかけて真っ白になっても、皆我慢していました。お父さん、お母さんと遠く離れて来ているのに、泣いて先生方を困らせる子はおりませんでした。私はその時一年生

の担任でしたが、泣くのを見ませんでした。子どもなりに非常時を知って、我慢していたのだと思いました。

東京への空襲は、昭和二十年五月二十五日以後ありませんでした。その五月二十五日に私の柏木の家が焼夷弾等で焼けてしまい、一人留守を守っていた母（父は芝区役所の役人なので役所に常時おり、兄は飛行兵で軍隊、私は生徒と疎開地）は腰紐をほどいてバケツに結び、川の水を被りながら青梅街道を逃げたとの事です。その時青梅街道にはズーッと死んだ人が倒れて何処までも続いたとの事でした（母から聞いた話）。又、柏木の家の側にその当時の靖国神社の宮司さんの家があり、お庭の防空壕の中から、宮司さんのお嬢さんの声で「あなたしっかりしてください」と言う声を聞いたそうです。後でわかった事は、そのお嬢様ご夫妻は壕の中で煙に巻かれて亡くなったとの事でした（母から聞いた話）。

八月に広島、長崎に原子爆弾を落とされ、このままでは日本は全滅になると言う事で、昭和二十年八月十五日に全面的に降伏したのです。

戦争が終わって、川治から東京へ皆帰って来ました。あの恐ろしい空襲もなく、夜も明るい所でご飯が食べられ、ぐっすり安心して眠れ、ホッとしました。しかしそれからが又大変でした。神応小は校舎が無くなったので、焼けなかった近くの三光小学校に間借りです。教室が不足しており、五、六年生以下低学年は二部授業でした。先生方の中には帰る家が無く、しばらく三光小の玄関に下駄箱で囲って暮らしている時もありました。私も家が焼けて無くなっていましたから、母一人でいた北多摩の方の知人宅に行きました。そこからしばらく片道三時間ぐらいかけて神応小に通勤しました。父は相変わらず役所の傍らに間借り生活をしていました。しばらくして、今の札の辻の学校の焼け跡に区の職員のバラックを区が建てたので、やっと私共の一家は揃って暮らす事ができました。父は焼けた下町の戸籍を作りに出かけていました。そのうち神応小も、バラックですが校舎が一棟でき、一、二年生から段々に戻り、全校生徒が帰りました。ピアノ等の関係で、音楽教室だけはしばらく借りていました。バラックの校舎は体育館等は無く、卒業式、学芸会等の時は教室と教室の間の壁を取り外し、三教室続けて使ったり、職員室は十畳位の部屋に大きな机を一つ中央に置き、校長室、職員室として、二十人位の先生方が使用していました。プールは「ヒビ」が入っていて、しばらく使えませんでした。授業の合図等には、入口の外に（玄関は無い）吊してある鉦を用務員が紐を引いて鳴らしていました。バラックでも校舎はできましたが、教具が足りません。先生方で相談して、その頃あった高輪映画劇場を借り、生徒の歌、踊りはもちろん世界的に有名な石井漠先生という舞踊家や、町の日本舞踊の上手な方等が、子

供たちの為ならと、無料で出演してくださり、父兄や町の人達が会員券というような形で寄付してくださり、そのお金で教材の一部を揃える事ができました。

戦争は終わっても、食物、衣類等は切符がひとり何枚と決められていて、お金があっても切符が無ければ手に入りません。お米の配給も不足して、さつま芋、小麦粉等が主食として配給されました。ある時は新円封鎖とかで、自分のお金であっても決まった額しか銀行から出せなくなってしまった事もありました。今はパンを焼くのに便利な物が沢山ありますが、その頃は何もありません。六年生は理科の時間に木ぎれや、ブリキの「キレハシ」等でパン焼き器を作り、電気を通して、小麦粉を溶いてパンを焼き喜んだ事もありました。今思えばパンと言えたかどうか疑問です。

地震等でしたら他県から助けて貰えますが、戦争に負けたのですから日本中地震に遭ったようなものです。他から助けて貰う事は出来ません。

神応小の西方に奥三光という処があり、ほとんど焼けていません。大きな家がたくさんあり、戦後しばらくアメリカの将校達に接収されていました。その向こうに自然植物園があり、そこに火薬庫があった事を後で知り、そこに爆弾を落とされたら大変でした。何故か神応小とその周りの一部が焼け、近くの聖心女学院、北里研究所、バス通りの両脇の商店街は何ともなかったのです。又、神応小のずっと東の方に三光坂がありますが、坂の途中に服部時計店の社長の家がありました。今銀座四丁目にある和光がその頃は服部時計店でした。その社長さんの家に戦後、戦争を起こしたという事で日本人がアメリカ人に裁判をされました。その時のアメリカから来たキーナンという検事が接収していました。

学校では給食が始まり、始めはアメリカから送ってきた粉末牛乳をお湯で溶いたものとパサパサしたコッペパン一つでした。そのうちに時々みそ汁を出す事になりましたが、その実は高学年の生徒が体育の時間に作ったものなのです。その頃高松宮様のお庭はもっと広くて、近くの学校に裏庭を貸してくださいました。そこで野菜を作らせていただいていたのです。私はその頃六年生の担任でしたので体育の時間によく行きました。今の高輪支所あたりに裏門があり、そこからお庭に入り、今の高松中学校あたりに畑を作りました。一度宮中服を着た妃殿下が、お散歩で畑のそばまでいらっしゃって、ねぎらいのお言葉を頂いたこともありました。（宮中服とは筒袖でズボンのような袴のようなものをつけておりました。その頃女の宮様は皆様そのような服装でした。戦争中はもちろん、戦後もしばらくその様でした。）

あの頃の事を思えば今ここに元気で生きているのが不思議な気がします。あの頃の子供は素直で、我慢強かったと思い

ます。その頃の教え子は今、七十才位になっています。今振り返ってもあの恐ろしい戦争だけは二度とあってはならないと思う今日この頃です。

集団疎開先での生活

第一部　（手記・疎開）

集団疎開を振り返る

白石　弘

昭和十九年八月、芝区立愛宕国民学校の校庭に全校在籍児童の凡そ三分の一にあたる三年生から六年生までの生徒約百三十名が集合し、集団疎開先である栃木県に向かって出発した。他の生徒は親戚や縁者を頼って縁故先に疎開する恵まれた生徒たちであり、そのとき既に殆どが疎開して東京を離れていた。浜松町駅から上野駅へ、そこから東北本線で宇都宮の先の宝積寺駅へと向かった。途中の旅はまさに遠足気分で、車窓から見える一面の青田がグランドのように青々と豊かに広がっていた光景は今でも目に浮かんでくる。

宝積寺駅には昼過ぎに着き、駅前広場で土地の人が馬鈴薯を山のように積んで我々をもてなして呉れ、思い切り食べた思い出がある。でも皆と楽しんだのはほんのひと時で、すぐに居住地域別に三班に分けられ、我々愛宕町近辺の生徒は塩谷郡北高根沢村字上高根沢の浄蓮寺という名の寺へと向かった。男女合わせて四十人がこれから親と離れて合宿生活を送ることになる。駅からは約六キロもある不便なところであっ

た。なお別々になった他の二つの班の宿舎は同一村内ではあったものの、編入した学校はそれぞれが異なり、お互いが顔を合わすことは殆ど無かった。因みに芝公園地区の生徒は旧家である宇津家、田村町地区の生徒はこれも旧家の見目家が宿舎であった。私どもの宿舎浄蓮寺は建物の真ん中に本堂があり、本堂を挟んで左右に三十畳ずつ畳の間、左側を男子、右側を女子が使い、お互いの行き来は殆ど無かった。

私は六年生、最上級であり身体も大きかったので、自然と寮長の役を仰せつかったのであった。全体を監督する先生は馬力のある男の先生で、保母さんが五十代の小母さんと四十代のお母さん代わりの二人で日常は女子の下級生の面倒を多く見ていた。私は昼間から土地の子と遊び、夕食前に寺に帰り六時三十分に一斉に食事を取ったのであった。古い寺であるため、疎開児童用の便所を墓のすぐ近くに新しく作った。小便所四、大便所三でそこへ行く廊下も新設されたが長さが二十メートルほどもあった。夜、墓の前を通るのが怖いとのことで、私の一存で下級生には縁側から小便をさせた。一週間ほど経つと臭いで住職にばれ、男の先生から全員へ見せしめとばかり私が代表でビンタ制裁を受け、その厳しさを身に沁みて痛感した。

九月からの二学期、徒歩二十分ほどの村の学校、上高根沢国民学校へ全員が編入。校舎は木造建築で広い校庭、校舎へは裸足で上がるわけで、都会の近代的な学校とはその違いの大きさにびっくり。始業終業は軍隊同様喇叭手が吹くラッパの音で事を運ぶ。毎日放課後にバケツに汲んだ水で雑巾をゆすいでは絞り廊下を寺のように拭き清める。勉強で苦労したことは無かった。当時は東京と地方との格差が大きかったから予習や復習を一切しなかったのに充分授業について行くことができた。私は本好きで東京に居たときは日比谷図書館に周に一回は行き貸本屋も利用していたが、疎開先では仲間の父兄が持ってきてくれた本を回し読みして楽しんだほかは読んだ記憶がない。誰かが持ってきた紙芝居を自己流にストーリーを作り皆に見せたら評判となって、村の集まりで上演したところ年寄りが涙を流して見ていたのに気を良くして、あれこれと上演しているうちに宇都宮市役所にまで出張して大講堂で上演する羽目に至ったのであった。このことはいかに娯楽が乏しかったかを物語る。

村の人は初めのうちは疎開の子を大事にして呉れたが、日が経つにつれて薄れていった。

「思い出は　疎開の子らと　村の人　畦道あける　夏の午後かな」

これは村に入った直後の夏に「思い出」という題で作った私の短歌であるが、初めは村人の暖かさを感じていたが、そのうち我々の仲間に平気で食物をたかりに行くような者が出

てきたりしたこともあり、疎まれていったようだ。それはそれとして、間もなく秋になり稲刈りのシーズンに入ると毎日のように鎌を持って農家へ手伝いに行った。手伝人の数が多かったので村人には喜ばれたのであった。しかし慣れない仕事ゆえ鎌で手を切ったりすることも多々あった。私も手を切ったのであるがその痛さは今でも記憶に残っている。なお報酬としておやつにさつも芋が出た。それを十分に食べられることで満足した。食事は本堂から母屋に渡る廊下を下がった部屋が食堂で、片側四人ずつ八人の白木作りの机が六つ並んでいた。「一粒のお米でも、お百姓さんの努力を忘れず、有難く、おいしく頂きます。」これは毎回食事の際に全員で合唱する感謝の言葉である。

場所によってはお米が足りなかったところも多かったようであるが、高根沢村は関東で有数の米どころであったので、量こそ丼すれすれではあったが毎日お米を食べることが出来た。だが食べ盛りの私にとっては満腹感を味合うことは一度もなく、下級生の誰かが残さないかなと始終思っていた。今にしてみればその禿鷹根性が浅ましい。お米は七分搗きでおかずとしては大根や切干大根を煮たものが多かった。かぼちゃもよく食べされられた。ごくたまに鮭缶の炊き込みご飯が出るときがあったがその美味しさは未だに忘れられない。こんなこともあった。塩原だか川治だか温泉に集団疎開した学校がある。温泉はあっても周辺が農村ではないので食料には事欠いたようだ。そのような場所へお米を回すのだといって、お米を六俵荷車に積み宝積寺駅まで引いて行ったことがある。自分たちだって別にお腹一杯食べているわけでないのに、どうしてこのお米をよそへ運ばなければならないのか、切ない思いをしながら荷車を引いたのであった。

お腹が減って眠れないこともあった。父兄の面会日はチャンスで、先生の部屋の茶箪笥に食べ物が入っているので盗むこともあったが、数の少ないものはバレてしまうので敬遠する。寮母さんの部屋から盗んでも暖かく見守ってくれたことは忘れられない。弁当はおかずは決まって大根の煮付け、食事時に蓋を取るとご飯は半分に片寄り、冬場にあっては凍っているかのように思えるほど冷たかった。現地に着いた直後に話は戻るが。終わり近くとはいえ未だ季節は夏であったので僅かな間ではあったが、近くを流れる五行川と言う流れの速い十メートル幅の小川に下級生を連れて行って泳いだ。川の真ん中は結構深くて一メートル五十位はあった。一度溺れかけた子があり抱き上げて歩いた記憶があるので深さは確かだと思う。蛇が川淵にうようよ居て、時々川を泳いで渡るので鉢合わせになったこともあった。やまかがしだったと思う。

秋には栗拾いが楽しみだった。村の東側一キロ程のところに高さが五十か六十メートルくらいある「台の原」と呼ぶ岡

があり、そこには栗の林があったので休日には拾いに行った。但し渋皮を剥いて、ナマで食べるので数多くは食べられない。寺の境内にも屋敷栗と言われる大粒の栗があったが住職の目が厳しく一度も口にすることは無かった。秋も深まってきたときの情景のひとつに縁側で日向ぼっこしている女子生徒たちの姿がある。と言っても暖をとるために日向ぼっこをしているのではない。猿のようにお互いが髪の毛の中に湧いた虱を取り合っているのだ。その哀れな姿は今でも私の目の奥に焼きついている。私の柳行李には五円位入っていたと思うが特に買う物はなかった。男の子の散髪であるが、寮母から行けと言われてから一週間後に行く。散髪屋が学校の通りにあり料金は忘れたが確か一円位であった。水は用水槽のような容器からシャワーとなって頭を洗ってくれた。理髪師は中年の女性であった。帰路、学用品を買うことが楽しみであった。『りんご、りんご、りんご、りんご可愛い独り言』女の子がいつも歌っていた歌だ。それに引き換え男子は歌など歌わない。腹が減るからでる。秋も終わり頃となると、栗もなくなり間食は零だから仕方がない。

　冬が近づいてくると足が凍るように冷たくて霜焼けがひどくなり、その霜焼けに秋に刺されたブヨのただれが合わさり痛みを通り越して無感覚になるほどであった。冬には焚き火が日課であった。毎朝近くの森へ行き落ち葉を拾って来ては燃やした。毛糸の手袋を二枚重ねして拾うのだが寒さで手は痛いし、しかも雪が深いので結構苦労したのであった。今でも忘れられないのは真冬裸足で雪合戦をしたこと。それぞれに陣地に旗を立てその旗取り合戦をするのであるが、土地の子は雪を石のように固く丸め、一番に旗を取りに行く者にその石のような雪の塊を投げる。それが顔や目に当たると腫れあがる。特に疎開っ子に対しては厳しい。それでも真っ先に進んで行かなければ土地の担任の先生から弱虫を言われる恐れがあるので必死であった。土地の子と遊ぶのはコジハンと称するおやつを貰うためであったような気がする。おやつと言っても、夏はとうもろこしやかぼちゃ、冬は餅である。餅にバターを塗ってやったら石鹸をつけたと吐きだしたのが居た。最近、この近くまで行ったのであるが当時とは全く違い都会と同様である。いやそれどころか、ある面では都会以上ですらある。上記のような話は今や昔語りであろう。正月を迎えた筈であるが祝った記憶がない。雑煮が出た記憶もなく通常通りのご飯であった。

　私達六年生は翌昭和二十年三月に中学進学のために帰京することになった。集団生活にも慣れ、土地の子とも仲良くなったため、親やきょうだいと離れての生活ではあったが一度もさびしい気持ちにならなかったような気がする。しかし、これは六年生という高学年であったからということもあろう。

下級生の中には夜になると親を恋しがって泣く子が何人かいたが無理もない。何とか慰めようと努力したことも度々であった。なお、私は最上級生という立場をふまえ、土地の子たちともできるだけ仲良くし、大人の方たちに対してもそれなりの気遣いをしていたことを思い出す。

東京へ戻ってきたのが三月七日で、その三日後の三月十日に東京の大空襲があった。その日の空襲では深川や本所のいわゆる下町が焼き尽くされ十万近い焼死者が出たのであるが、芝地区は被害が殆ど無かった。だが、翌月の四月十三日の夜の空襲では愛宕町にあった我が家が焼夷弾の直撃を受け焼け出されてしまった。そこで芝琴平町へ移り暮らしていたが五月二十四日で空襲でそこも焼かれてしまったのであった。戦火を逃れるために学童強制疎開をしたのであったが私の場合は疎開から帰ってきたのちに二度も家を焼かれたのであった。一緒に疎開しそして帰京した仲間の多くが同様な目にあった。何のために集団疎開に行ったのか、私たちの年代に限って言えば疑問の残る国家戦略であった。私の弟は第二次集団疎開者として私が帰京するのと入れ違いに私が世話になった浄蓮寺へ行った。だから弟は戦火に合うことは無かったのであるから、年代によっては集団疎開が無駄ではなかったことも事実である。

今になってみると集団疎開は私を含め児童を短期間で独立心を養成する又とない機会であったと感謝と懐かしさが厳しく辛かった思いを上回っている。だからといってこれから先の時代の子供たちにこのような形での生活を強いるようなことはしたくはない。

小島　義一　画

小島　義一　画

第一部　（手記・疎開）

私の子ども時代

長田　延満

昭和十六年（一九四一）十二月八日、日本はハワイの真珠湾を奇襲攻撃して米国を主に、英国他連合国と戦争をし、昭和二十年八月十五日降伏して終戦を迎えた。私が小四の時に始まり、中二のときに終わったのです。

米国人はヤンキー＝洋鬼であり、鬼畜米英（鬼畜生にも劣る残虐な様）を倒す戦いであり、男の子は兵隊になって戦いに行くことが勇ましい立派なことであると鍛えられ、私は小六で航空機乗員養成所の入学試験を受けた。結果は聴力不十分で不合格となったが今にしてみれば幸運だった。代わりに帝国第一高等学校に入学した。戦争が激しさをまし兵員確保のため「子どもを鍛えよ」の軍の命令か小五、小六と冬に朝6時に学校で剣道をさせられたが、これは体力、気力、礼儀等の面ではよかったと思う。

終戦（敗戦）の玉音放送は、勤労動員先の工場で聞いた。不安はあったが、なにか、ほっとした気持ちになったことを今でも覚えている。私はその年の三月十日の東京大空襲で生き地獄にさらされたので、それ以上恐ろしいことはいくらなんでもないだろうという想いからだった。

家を焼かれてから終戦の日までの約半年間、父の郷里から通学した。といっても行き先は、工場と江戸川の土手の農場だった。家を毎朝五時前に出て「鶴ヶ峯」駅まで約四キロ歩き、神中線に乗って横浜に出て東海道列車・国鉄電車で新小岩まで。帰宅は二十時過ぎだった。神中線は三十人乗ればすし詰めになる小さなチンチン電車で中に入れず屋根の上にはいつくばって乗った。当時は列車も電車も窓から出入りするのは珍しい光景ではなかった。それは戦後二～三年続いた。深刻な食糧不足の買出しの混雑だった。当時は戦前からの食糧管理統制で米はもとより殆どの食糧が配給制であったが、それではとても生きていけず、違法だがヤミで買い付けなければならなかった。

ある学者が闇をやらずに配給だけで生活して餓死したこともあった。米はまるで汁のようなお粥でしか食べられなかった。芋が食べられればご馳走で、なにもなくその葉っぱを茹でて食べたがそのざらざらがのどをさすような刺激は今も忘れられない。

戦後は田舎から江戸区の松江に移住して行った。家のそばの池のたにしとか家から二キロ程はなれた中川に行き蜆とかをとってきて蛋白源にした。母は生きている間、中川を渡る

時は川にお辞儀をしていた。中川の蜆に助けられたとよく言っていた。

砂糖などは全くなく、甘いものが好きだった私のために柿の皮を吊るして乾かしそれを煮詰めた汁でおしる粉をつくってくれた。それは絶品だった。

戦後、預貯金の資産は一定額以上は無価値となり、また食糧のみならず衣類他すべてのものがなく、インフレとなりお金では食糧を買えない時期が続いた。戦後二年間、わが家は疎開で残った母の着物の物々交換で命を繋いだ。それも底をつき、見かねて私は、自分で夜学に転じ働き始めた。昭和二十二年四月、十五歳の春でした。

毎日新聞

第一部　（手記・疎開）

私の戦争体験

藤野　鷹次

（金杉の空襲）

私が小学校五年生の学芸会で演じた劇の題名は、「防諜」で、「小学生が、怪しい大人の行動から、スパイを見つけ、逮捕に協力する」のが、ストーリーだ。軍国主義全盛で本土空襲が目前の時期だった。

昭和二十年二月二十三日、約半年ぶりに「集団疎開」先の栃木県塩原温泉から、小学校卒業のため、われわれ六年生の男女五十人ほどが、下級生の羨ましそうな顔を後にして東京に帰ってきた。

皮肉なことに、米軍の東京空襲は、これからが最高潮となった。三月十日の江東・浅草の大被害を、まるで花火でも見るようにして見た。それから、一ヶ月もしないうちに、新堀と金杉の大部分が、米軍の焼夷弾（しょういだん）で焼き払われた。

焼け残ったのは、金杉三・四丁目で、二丁目は少し、浜町は、四分の三ぐらいが焼け残った。翌日、新堀の焼け跡で三

人の焼死体をみた。前夜の空襲で、やられた人だ。

この空襲の時は、油脂焼夷弾と黄燐焼夷弾の二種類が落とされた。前者は、飛び散ったゴム糊状の火の玉が、木造家屋について、メラメラと燃えるもの、後者は、銀色の花火が、五・六メートルの直径の噴水のように、猛烈な勢いで吹き出るもので、水をかけても消せるものではない。

この黄燐焼夷弾が、金杉三丁目（現・芝一丁目）の安楽寺まえの道路の真ん中で、孔雀の羽を広げたように、燃え出しているのを見た。シュウーシュウーという音と昼間以上に明るい道路だけが、今でも忘れない。今でも不思議なことに、私以外には、誰も居なかったように覚えている。ただ、六十年も昔のことで、見ていた時間が、何分か、何秒か？　いくら考えても、思い出せない。空には爆撃機の爆音、竹芝小学校前あたりから、新堀方面は火の海、という極限状態での小学校六年生の私の記憶は、不正確かもしれない。

（学童集団疎開は塩原温泉）

栃木県塩原温泉は紅葉の名所です。昭和十九年八月の、暑いひざしの中、竹芝小学校の四・五・六年の三学年二百五十名ぐらいは（その後三年生も参加）、遠足にでも行くような、浮き浮きした気持ちで、肉親の心配をよそに上野駅からＳＬの汽車に乗りこみました。これが、「学童集団疎開」の出発でした。今で言えば、林間学校に行くのに似ていました。六年生は半年、五年生は一年半、四年生は二年半後の卒業までの、長い長い「林間学校」だと思うと、下級生の中には宿に着いた途端に、親兄弟との別れに堪えられなくて、泣き出していたという話を、随分聞いた。

昭和十九年八月というのは、太平洋戦争の終わる一年前で日本は連合国側と本土決戦は避けられないと、新聞・ラジオ・そして竹芝の先生からも真面目に言われていた時期でした。本土への空襲も必至の情勢なので、小学生を安全な場所へ集団で疎開させる。それが、「学童集団疎開」でした。戦争を続けるために、数年後に、すぐに戦力として役立つ人的資源としてであります。竹芝小学校の疎開先は、神谷旅館といい、栃木県塩原温泉の畑下戸（はたおり）にあり、当時も高級旅館の一つで、今は、建て替えてホテルとして営業しています。そばには、〝晴琴楼〟という芝浦小学校の宿があり、尾崎紅葉が金色夜叉を書いた旅館でした。

（学童疎開の何人かの思い出）

＊楽しい思い出より、ほろ苦いほうが多かった。いま思えばあの半年間は、子供としてあるいは、男になりかけていた多感な少年の半年として、その後の人生に、強烈な影響を与えた貴重な経験だった。

＊どうしても泳げなかったが、宿のそばの箒川で、水遊びをしたお陰で、中学生からは泳げるようになった。
＊箒川の川辺を掘ると、温泉がわいてきた。
＊箒川といえば、流れの早いところを腰にロープをまいて渡らせられた。五メートルほどの水路に、みんなの渡る小橋をかける作業だったと思うが、今だったら、こんな危険なことをやらせる先生は、いないのではないか。みんなのためには、少々危険なことでも、やれる勇気を養うためだったのか

（腹がペコペコ）

＊いつも腹がへっていた。
＊栗ひろいを初めてやった。落ちているのは、大人の親指の頭ぐらいの小さなヤツで、腹がへっているので、それをナマ（生）で食う。途端に便秘。
＊便秘といえば、生栗を食べることは、禁じられていて、下剤なんか先生にもらいにいけないので、指や割り箸を使って、コロコロしたのを、出してすっきりしたこともあった。
＊夜、栗に傷をつけ、宿の台所の囲炉裏の灰の中に埋めておく、朝はやく取りにいくとうまい具合に焼けている。
＊栗ひろいにゆき、ピンポン玉ぐらいの大きな栗のなっている木をみつけ、みんなでワイワイいいながら木に登って落としていたら、栽培していたところで、おじさんに追いかけられたが、だれもつかまらなかった。栽培していた屋敷栗というもので、知らないうちに、柵の中に入ってしまった。

（はじめてのモノゴイ）

＊下から百メートルも見上げるような細長い岩山が天狗岩だ。宿から一時間程で行けたので、何回か行った。その時、多分新婚さんと思われる二人づれにあい、「何か食べる物はないか」と迫り、乾燥芋をもらった覚えがある。子供であっても七～八人からたのまれれば気持ちわるいか、あわれにおもったか、わからないが。
＊農家の軒下に吊るしてある干いもをとって、食べたこともある。山に食いものがなくて、里にさがって畑の作物を食い荒らす、猿の気持ちがよくわかる。

（面会のあとは腹くだし）

＊嬉しかった。みんな食べすぎて、おなかをこわした。先生から、「面会の時は、食べてはいけない、親がもってきたものは、みんなで食べる」といわれても、みんなに食べさせる程の食べものを、持ってくるほどの余裕は親にはない。親は、先ずわが子に出す。ほんの少し余分に食べても、普段から胃袋がカラだから、すぐ腹をこわす。動物園などで、「餌をあたえないで下さい」の注意書きを見ると、ふいに、にが笑いす

ることがある。

＊面会の時、親たちが持ってきたお菓子類が、先生の部屋の床の間にあったが、みんなに分けてくれなかった。

＊先生の部屋に行くと、カチ栗（栗をゆでて乾したもの）をやかんの湯気で柔らかくしたのを、貰って食べたことがある。もしかすると、みんなで拾った栗を、先生は、自由に食べられる立場にあった。

（くいもの以外の話題は）

＊食い物のうらみは恐ろしいが、食べものを、東京から送ることは、禁じられていた。そこで誰が考え出したのか、「栄養剤」ならいいだろうと。東京にいる大人の発想だと思うが、今でもある錠剤の「わかもと」やそれとと同じような、チョコレートの味のする「スタート」が忘れられない。自由に送れるのだから、〝お菓子を、一人一人の子供が持っている〟のと同じことで、たくさん持っている子と、そうでない子があった。

＊栄養剤の話は、「学童集団疎開」では、竹芝以外でもあった話で、子を思う親心というか、「食べ物」ではない「薬」で、空腹をしのがせた知恵は、大したものだと感心する。

＊私は、級友のリュックサックにしまってあった、栄養剤を盗んで、先生にひどく叱られ、級長（六年生のクラス代表だから、今の生徒会委員長？）をやめさせられた。悪いことをしたという反省よりも、屈辱感にたえるのが、つらかった。

＊一週に一度、さつま芋だけの夕食があった。この日だけは誰もがおなか一杯食べたという満足感の味わえた食事だった。だから中には、残す子供もいたが、部屋に持って帰ることはできなかった。

＊芋は腹一杯になるけれど、すぐ腹がへる。そこで残した芋を下駄箱の中に一時隠して、夜中に蒲団の中で息を殺して食べたことがある。蒲団の外は、便所の小便が凍るほど寒いのだから、リスが食料をかくすのによく似ている。

＊「箸とらば、アメツチミヨの御恵み、父と母との恩を忘るな、いただきます」と、大声で唱和して食事したのも懐かしい。恩なんて死語になったようだが。

（軍国少年になんの疑問もなく）

＊折り紙の得意だった級友が、先生から「女々しい」といわれて、そうとう傷ついたという話もある。

＊なぜ殴られたのか忘れたが、「往復ビンタ」を激しくやられた友がいた。

＊裸足で旅館の前の雪の坂道を、昇り降りさせられ、宿の子供に笑われた。当時は誰かが、よくないことをすると、「連帯責任」で、その人のグループが、お仕置きをうけた。

＊当時、東京空襲はまだなかったが、警戒警報は、随分だされはじめた頃で、軍国調の先生は、ますますピリピリしていたようだ。

＊塩原小学校の校庭の忠礼塔には、よく行き、皇居遥拝はよくやった。夜寝床の上で、東京方面にむいて、お父さんお母さんおやすみなさいと、毎晩唱和していたが、こちらのほうが、子供心にも、昼間の皇居遥拝とは、一味違った遥拝ではなかったか。みんな（すくなくとも男子は）バリバリの軍国少年になっていて、陸軍幼年学校とか、江田島の海軍兵学校、予科練、特別幹部候補生になって「お国のために戦おう」という気にさせられていた。だから、翌年の八月の終戦を聞いて、私は、今の皇居広場の玉砂利に土下座して、「戦争に負けたのは、私たちがいたらなかった」と、死んだ昭和天皇にあやまりにいった。天皇や皇室のテレビ映像などは、今でもチャンネルを切りかえて見ない。

（寂しさの余り、「脱走!?」も）

＊宿からバスで一時間乗ると、東京行きの汽車がとまる「国鉄」西那須野駅。何人かが駅員に見つかり、宿に連れ戻された。学校や先生にとっては、不手際となるのと、万一のことを考えて、関係筋に手配していたのではないか。服装や言葉づかいで、「土地っ子」でないのは、すぐばれた。

＊すべての手紙は、「検閲」だった。今だったら、大問題だ。宿の前に、郵便ポストがあったが、先生が、「疎開」の子供が、「内緒で手紙をポストに入れても、必ずそれぞれの学校に、戻される仕組みになっている」と言うのを、本気にしていた。

＊東京では、「疎開にいった子供の状態を」憂えて、親たちが集まって、なんらかの改善策も協議されたようだが、それは戦争中のこと、それ以上のものにならなかった。

＊東京に残って「集団疎開」に参加しなかった子、途中から田舎の親戚の家に「縁故疎開」にかわった子、最後まで「集団疎開」させられた子など、さまざまであったが、子供も先生も保母さんも、みんな戦争の犠牲者だったと思います。最初は、三・四・五・六年生だけだった集団疎開児童も、敗戦の年の二月には、二年生も疎開して来た。

平和を祈る

佐藤　恒圓

八月に入ると六十一年前の記憶を呼び覚ますように強い日差しが照り付け、蝉の合唱も繁しくなる。八月六日広島原爆の日、九日長崎原爆の日、そして十五日は終戦記念日である。正確には敗戦記念日と言うべきかもしれないが呼称は何であれ、平和な世の中になり、これが六十一年も続いていることは有難い限りだ。大東亜戦争が始まった頃、昭和十六・七年には旧制中学校にも陸軍の配属将校（少尉以上の武官）が派遣され着任していた。学校の授業科目は教練の時間が増やされ、一週間に五時間、雨天の際には銃剣術で鍛えられ、他に柔道か剣道の選択科目が二時間あった。そのため通常の授業学習は極端に少なくなっていた。そして土曜・日曜のほか随時の勤労奉仕があり、教室が空室になる日が増していた。

教練は陸軍の三八式歩兵銃（訓練用）を持たされ銃の持ち方から射撃までの操作を教えられたが、訓練銃とは言っても形状、重量は全く同じに造られてあり、中学生の体には負担が重過ぎた。配属将校は武道場に生徒を整列させ「皆眼をつむれ」と命じた。そして戦地で戦っている日本軍の状況を説明し、日本軍の力が不足していること、そしてこの国を支えていくにはどうしても君達若者の力が必要であることを説き「飛行兵・特別幹部候補生に志願したいと考えている者は手を上げろ」と命じた。そして「今手を上げた者には書類を渡すからあとで職員室まで来い」と言い残して去った。誰が、何人が手を上げたのかは不明であった。

その頃から日曜祭日の区別なく勤労奉仕が多くなった。長崎港を見下ろす稲佐山頂上の高射砲陣地構築、長崎港伊王島の榴弾砲陣地の基礎工事、諫早市内飛行場の拡張工事等すべてモッコによる岩石土砂の運搬であった。昭和十八年九月学生の徴兵猶予停止となり、同年十月学徒出陣壮行会、昭和十九年に入ると学徒勤労令により健常者はすべて軍需工場に動員され就労することとなった。軍隊に招集された男性労働者の不足を補うためであるが、これは虚弱体質の私には耐え難いことであった。三菱造船所の巨大な組織の中では一学徒の健康等は全く考慮されることなく、就労二ヶ月半ばで倒れた。病院から交付された診断書には病名が肺浸潤と書かれてあった。肺浸潤と書かれてあってもそれは医者の理学的な所見であり肺結核に相違なかった。その当時、肺結核を肺病と言っており「肺病八年肋膜六年」と揶揄的な言いかたをされたこともあったが、実際には治療する薬剤も無く体力を付けるた

めの栄養も充分にとれない状況にあっては、大抵発病すると数ヶ月で死を迎えるのが普通であった。然し、私は死ななかった。理由は諸諸あるだろうが、いつの世にも例外と言うものが有るのであろう。寛解の状態を脱してから六十年余りを生きることとなった。

昭和十九年春頃から学童集団疎開がはじまり同年七月、サイパン島守備軍玉砕。東条内閣は総辞職した。敗戦の日が刻々と迫って来るなか、昭和二十年三月旧制中学の卒業となったが、卒業式には出席できなかった。名簿を見ると、学業身体ともに優れていた同級生の氏名は大分消えていた。海軍航空隊の予科練習生として、或は陸軍の特別幹部候補生として軍隊に入ったのであろう。卒業生のうち二名は浦上の医科学専門学校に進んだが、何人かは満州国や中国に官吏等の職を得て出国し、他は軍需工場に残ることになった。同年八月九日、ラジオで九州天草上空をアメリカ軍機が北上中と伝え警戒警報が出されていた。ぶらぶら病（肺結核）で自宅療養中の私は二階で横になっていたが、突然眼前で写真撮影のフラッシュを焚かれたような衝撃を受け階段を転がるように一階に下りた。と、何だろうと考えている時間もなく轟音とともに外壁が屋内に押し込まれてきた。忽ち塵埃で何も見えなくなったが、手探りで床下の防空壕にもぐり込んだ。直近に爆弾でも落ちたかと感じたのだった。

どのくらい時間が経ったかは記憶に無いが、道路の方で声が聞こえるようになったので、外に出てみた。何人かの人が一斉に空を見上げていたが巨大な雲がもくもくと横に横にと広がり、上に上にと拡大していくところであった。これが原子爆弾の炸裂による噴煙であったことは二日ほど後に知った。我が家は長崎市の西端にありかなり損傷したが幸いにも倒壊は免れた。然し市の爆心地に近い北部中部の市街地・工場地帯は壊滅的な状況であった。医専に進学した二名や軍需工場で就労していた同級生たちの消息は全く途絶えた。直爆死だったのであろう。

そして八月十五日終戦の日を過ぎても、予科練や特幹など軍隊に志願して入隊した同級生たちや、卒業と同時に満州国や中国に渡った友人達も遂に帰ってこなかった。あれから六十一年が経ったが毎年暑い八月がやって来ると心は旧友たちの想い出に帰る。虚弱な体質だったから軍役にもつかなかった。肺結核を患ったため自宅療養となり原子爆弾の直爆からもはずれた。そして今、私が確かに生きているのは現実である。人間の運命などわかるものではない。吉凶禍福は人間の意志にかかわらずめぐってくるのだ。

戦争が無い平和であることは何と言っても有難い。この平和な日がいつまでも続くことを祈っている。

被爆体験

吉兼　実

私は当時十八才、広島高等師範英語科の一年生で爆心から一キロの学校寮で生活していました。八月六日は月曜日、当時は授業はなく、郊外の東洋工業に動員されていました。この日の朝七時半ごろ電車で広島駅に向かい、七時五十五分発の大阪行きに乗って工場につき、会社の説明をうけていました。八時十五分、左側の窓ガラスの彼方に、物凄い閃光が光りました。あっと思った時、講師が「大量生産とは」と黒板の字を指しました。その瞬間、どどっという爆風が襲い、窓ガラスがばらばらになり、そばに座っていた教授らが、血だらけになりました。閃光から爆風まで約十秒。爆心から四キロだったので、助かりました。原爆をピカドンといいますが、ピカドンの間が長ければ長いほど被爆の確率は低くなります。おそらくその確率は、極めて少なかったと思います。二時間ほどして、集合がかかり、学校講堂の御真影（天皇の写真）が危ないので、救出にいくと命令されました。今から思えば、残留放射能が一杯の爆心へいくなど、ぞっとする話になります。

途中、前途にもくもくと立ち上がる原爆雲を見ました。あちらからぞろぞろと、猛烈な熱で衣服が、皮膚がぼろぼろになった幽霊が、両手をだらりと垂れて何百人となく、ぞろぞろ歩いてきました。一体これは、どうしたのだと思いました。町は各所で、もうもうと火事の煙が立っており、どこをどうして学校まで行ったか、覚えていません。ただ、爆発後二時間、隊伍堂々と歩く団体といえば、私たちだけではなかったでしょうか。一人のぼろぼろになった老婆が、私のところに来て、「学生さん、このカタキをきっととってください」と、叫ばれました。私は一時、茫然となりました。私は、それまで欧米の自由主義にあこがれ、学校も英語科を選んだほどの、変人でした。鬼畜米英といっても本気にしませんでしたが、この時はじめて、米国は、鬼畜だと思いました。私の人生観を変えた一言だったのです。その後、英語での仕事は、今でも続いていますが、米国のことを思う時、あの老婆の声が、今も、浮かび上がってくることがあります。

それから四日ほど、毎日、工場からトラックで爆心地の救援活動に駆り出されました。町に転々と転がる被害者を次々に見ていって、何も言わない人は、もう駄目、水をくれとさやく人だけを、病院に運ぶ役でした。学校が、赤十字病院の近くにあったので、そこに運べといわれたのですが、病院

はすぐ一杯になり、暑い太陽の下に、負傷者を寝かせるわけにはいかず、近くの防空壕に運ぶことにしました。入り口が狭いので、両手を持って運びこもうとした時、ずるりと皮膚がむけてしまうあの感覚は、今も忘れられません。

ソ連参戦のニュースがあり、もう駄目だと思ったのでしょうか、すぐ、故郷に帰れと言われ帰ってきました。しばらくして、呉の海軍工場で働いていた親戚の男子が、急に髪の毛が抜け、死んだと聞きました。呉から広島に入り、多分、残留放射能でやられたのだと思いますが、少なくとも、五日ほど爆心地付近で作業した私のほうの条件が悪いと思い、ぞっとしました。すぐ医者に行って、血液の検査をしてもらいましたが、この時受けたショックは、多数の黒焦げ死体を見た時より、大きかったのです。私は、被爆後三ヶ月ほど、負傷した傷がなかなか治らず、多分、栄養失調のせいだと思っていましたが、今から思えば、放射能の影響であったと思います。しかし、当時は、残留放射能などは問題にもならず、これで死んだ人は、何人いたか分かりません。そして、いまなお、この残留放射能で、ガンなどの病気になり、苦しんでいる人々が沢山います。政府はいまだこれを認めず、原爆症の認定基準も、爆心から二キロ以内と決めつけています。だから、原爆の悲劇は、いまなお続いているのです。米国も日本政府も、こうしたことを、出来るだけ矮小化して、ごまかし続けてきました。核兵器が今なお生き続けているのも、このためです。私たち原爆被害者は、これだけでも、絶対に認めるわけには、いきません。